

西村寿行
ルジラ
血の
か
医父
り
牙

NON NOVEL



長編ハードアクション小説



NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月。ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていききたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれて、つねに変化し、新しく発見されていくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—122

長編ハードアクション小説 ^{ルジラ} ^{かげ} 血の翳り

定価 690 円

昭和 55 年 12 月 20 日
昭和 56 年 1 月 25 日

初版第 1 刷発行
第 5 刷発行

著 者 ^{にし} 西 ^{むら} 村 ^{じゅ} 寿 ^{こう} 行

発 行 者 伊 賀 弘 三 良

発 行 所 ^{しょう} 祥 ^{でん} 伝 ^{しゃ} 社

〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九尚段学ビル
☎ 03 (265) 2081

発 売 小 学 館
印刷 堀内印刷 製本 関川製本

長編ハードアクション小説

村寿行
の医^か務^げり



NON NOVEL

祥伝社

目次

第一章＊7

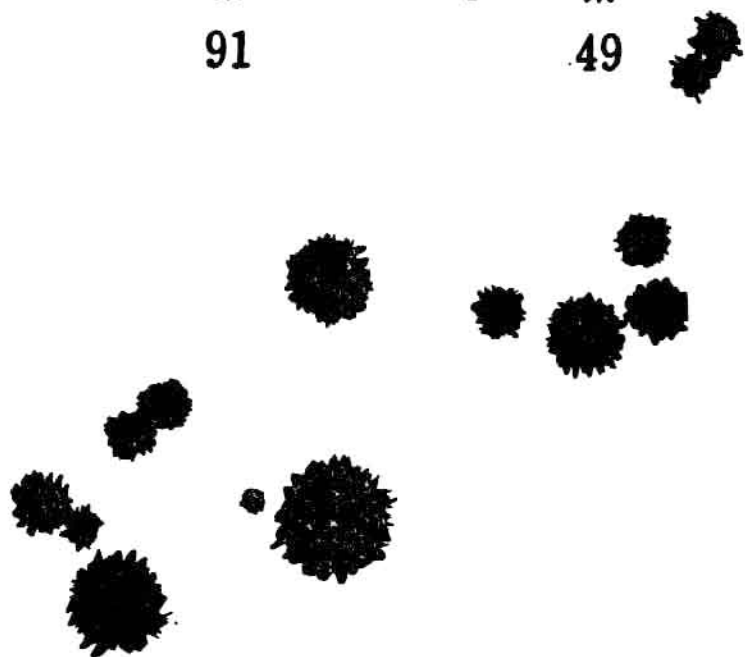
闇よりの触手

第二章＊49

因果いんが

第三章＊91

系譜

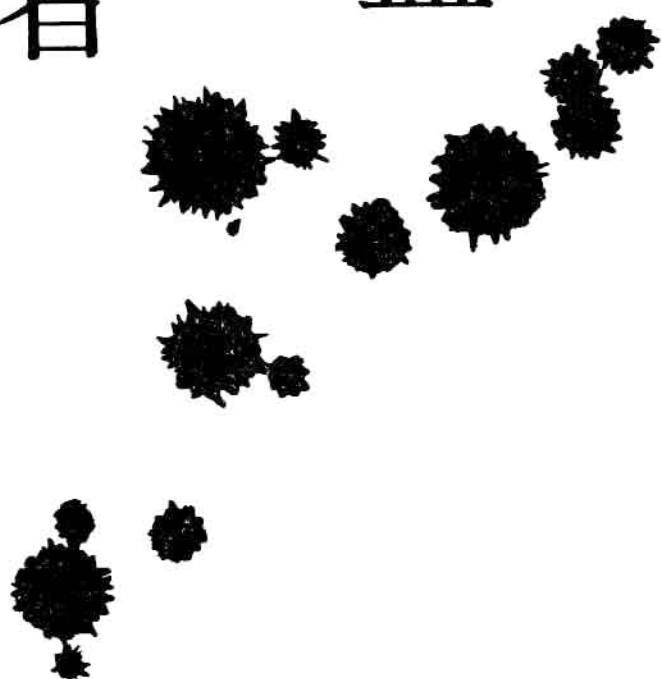


第四章 * 157

黒い血

第五章 * 205

殺人者



カバー構成・CEへ小松原京子
本文イラスト・喜多迅鷹
写真撮影・坂野豊

第一章 闇よりの触手

1

陽が沈みかけていた。

広い川面が茜に染まっている。朱を刷いたような光が川面や河原の草の繁みを染めても翔け立とうとしない数羽の水鳥がいた。

思い侘びているようにみえる。

霜月令七は、その水鳥をみていた。

多摩川河畔であった。遠くの鉄橋を京王線が走っている。その車輛まで赤い陽に染まっていた。炎のようにみえる。長い虫が、炎に焼かれて苦しまぎれに走っているようにみえる。

霜月は河原に腰を下ろしていた。

熱気を含んだ風に、指に挟んだタバコが燃え尽きようとしている。

やがて、水鳥が羽搏いた。

金色の粉が舞い散って、消えた。

夜に向かつて翔け去る水鳥から、視線を川面に戻して、霜月は身動きもなかった。脳裡にある像を、みつめた。

いまは亡い、妻と子の像であった。

三十歳になる妻の陽子と、二歳になる正昭が目の前が多摩川河畔で殺されていたのは、二年前の冬であった。

妻は凌辱されていた。相手は一人ではなかった。二人であった。腔に残った精液から、O型とAB型の血液型の二種が検出されていた。早朝、犬の散歩に来た老人が発見したのだった。

締め殺された妻の下半身は裸だった。白い体が凍っていた。腔の周辺に付着した精液も凍っていた。

霜月はその姿をみて、目をそむけた。下半身だけを剥き出しにされたというのが、女の哀しさをみせつけていた。凌辱して殺した男たちには、女にはそこさえあればよかった。性器さえあればよかった。その酷薄さが下半身の凍った死体に出ていた。

女を人間扱いしていない非情さがあった。

正昭はすぐ傍に転がされていた。絞殺であった。開いたままの両の目が凍って、空をみつめていた。

警視庁は可能なかぎりの捜査員を投入した。

霜月が捜査一課に勤めていたせいもあった。警察への挑戦ではあるまいか、となったのだった。捜査員は恨みをかうことが多い。もし、霜月を恨んで家族を殺したのなら、ことは重大であった。

だが、捜査は壁に行き当たった。

いまだに、犯人の影すら浮かばないままになっていった。

妻と子供の推定死亡時刻は一月二十一日午後九時から十一時の間であった。

霜月家は稲城市いなぎにあった。自宅から殺害現場の多摩川河畔までは車で十分足らずの距離にある。

当夜、霜月は家を留守にしていた。

聞き込み捜査がはかばかしくなかった。妻と子供は車で多摩川河畔に運ばれたことはまちがいがなかった。歩かせて行くことは不可能であろう。

その車の目撃者がいない。

霜月家を徹底的に調べたが、犯人のものと思われる指紋、掌紋、頭髪その他の遺留品は、なにもなかった。

争った痕跡もなかった。

母子は寝室にパジャマを脱いでいた。急いで脱ぎ捨てたという感じではなかった。たたんでこそいないが、乱れはみられなかった。

玄関の鍵は開いたままになっていた。鍵はいつも妻が置くところにあった。

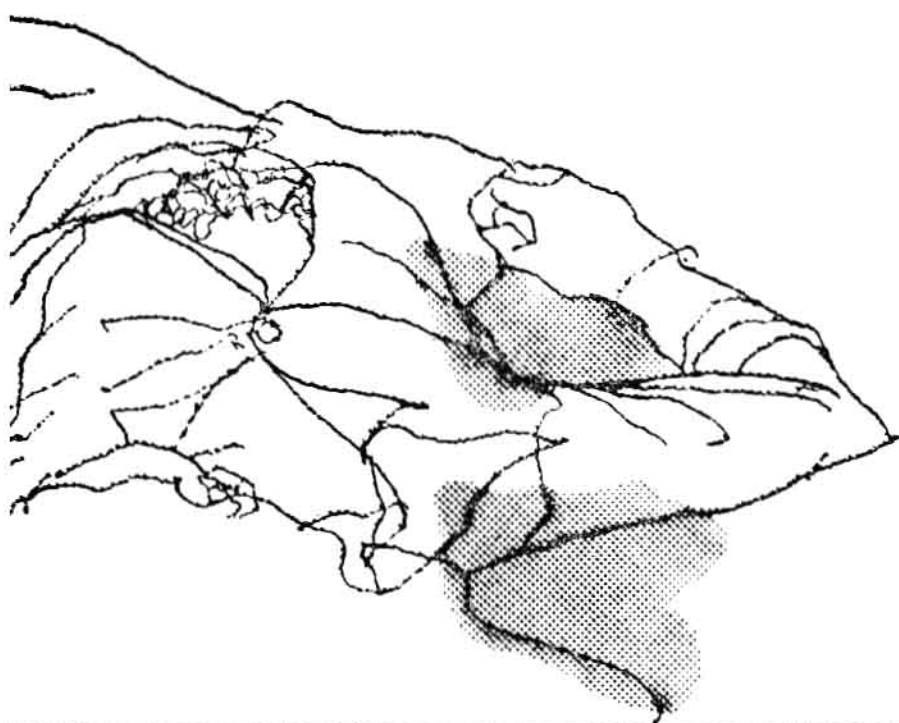
無くなったものの見当は、霜月にはつかなかった。しかし、預金通帳は残っていたし、現金その他には手をつけていないように思えた。

推定するとしたら、一つしかなかった。

何者かが、霜月令七を恨んでの犯行であった。霜月自身には手をつけがたい。

それに、霜月を殺すよりは妻子を殺したほうがより苦しめられる。

複数の犯人は機会を窺うかがっていた。霜月の当直の夜を選んで押し入ったのだ。鍵は犯人が開けたものと思えた。



鍵をかけ忘れて眠る妻ではないからだ。

妻がベッドに入るのは十時ごろである。犯人が押し入ったのは、推定死亡時刻から考えて夜の十時前後と判断できた。

妻は犯人に起こされたにちがいない。騒げば殺すといわれたのであろう。

着替えを命じられて、妻は犯人の目の前でジーンとコートに着替えた。子供も着替えさせた。子供は眠ったまま、妻か犯人かに抱かれて、連れ出されたものと思われる。

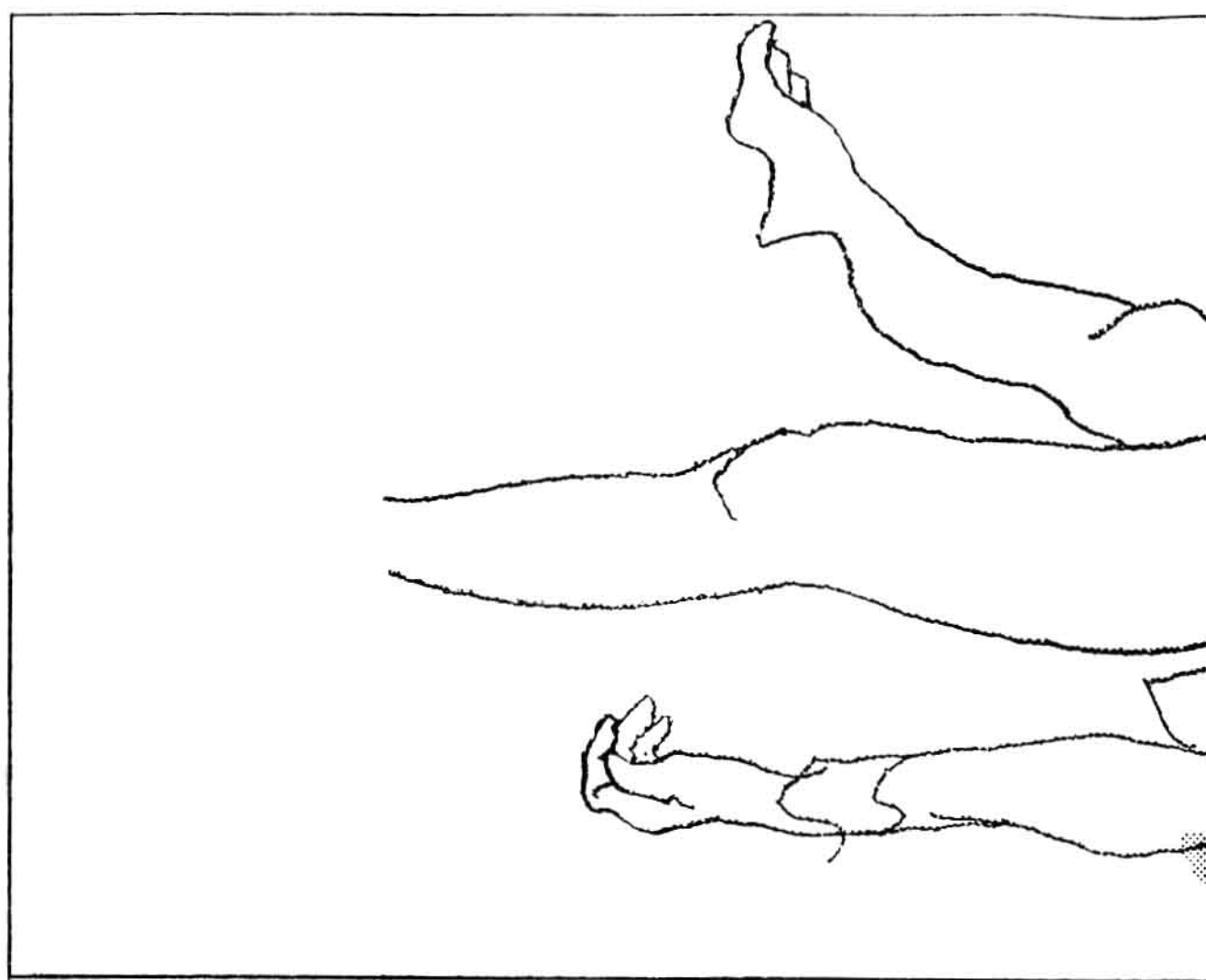
多摩川河畔に連れ出された。

子供はそこで締め殺され、妻は口と手足を押さえられて交替で凌辱されたのちに、締め殺されたのだ。

疑問が一つある。

犯人はなぜ、母子を多摩川に連れ出したのかだ。殺すだけなら、自宅で殺せばよい。凌辱が半分の目的であっても、自宅でできる。

それとも、霜月の突然の帰宅をおそれてのことなのか。



そうではないような気がする。

犯人たちは最初から妻と子を多摩川河畔に連れ出すつもりだったのだと、霜月には思えた。妻の死体がそれを示しているような気がする。下半身だけを剥き出されて殺されていた残酷さがそれを物語っていた。

自宅で同じ殺されかたをしていても受ける感じはちがう。

子供が殺されている。自分も殺されることを知りながら、寒風のすさぶ河原で凌辱される光景は、残された者にとっては堪えがたい思いがする。

犯人の狙ったのは、それではあるまいかと思えた。

恨みの深さが出ていた。

凌辱は霜月にみせつけるためのものであったかもしれない。

常識的に判断すれば、酷寒の河原で性交におよばなければならぬ性欲というのが、想像しがたい。何人かの男で突きつらぬき、精液にまみれた下半身を剥き出して凍らせるというのが、最初からの狙いであったのである。

しかも、子供はその傍で瞳を凍らせている。

だが、はたしてそれほど恨みを霜月に抱いた人間がいるのか。

捜査はそれに絞られた。

怨恨以外に動機は想像し得なかった。

霜月の過去が洗いざらい調べられた。

だが、どこからも容疑者の影は射してこなかった。射してこないままに、二年間が過ぎていた。

暮色のたどよう多摩河原をみつめる霜月の双眸は、暗い。

霜月は疲れはてていた。

警察を辞めたのが約半年前であった。事件が解決するまで専従捜査を命じるからと、辞職を慰留されたが、霜月は振り切った。

一年と六カ月が過ぎて犯人の影すら浮かんでいない事件であった。何年経ったところで、解決できないかもしれないとおびえがあった。見込みのない捜査に専従するのは、苦痛であった。これが他人が殺された事件とい

うのなら、別だった。

警察への甘えは許されないと、自身にいいきかせた。

まず、自身に打ち克つことだった。それができないようでは、犯人を闇から引き出すことはむずかしい。

警察を辞めることは人生への賭けであった。ここから先、人生を捨てることになるかもしれない懸念があった。犯人を追って無明の世界に踏み込むのだ。何年かかるともしれない。あるいは、何年を費やしても犯人を割り出せないかもしれない。あてのない探索の途中で、朽ちはてるおそれがある。

それは、覚悟していた。

朽ちるのが運命なら、朽ちようと思った。

妻と子供が、無残な殺されかたをした。自身が生きのびるために、妻と子供の哀しみを忘れることはできなかった。男なら、そうはできないはずであった。自身の人生を捨てても、犯人の探索の旅に発たねばならなかった。

男の人生はいつどこでポキリと折れるかもしれないの思いを、つねに霜月は抱いていた。

そのときが来ただけのことであった。

警察を辞めて、霜月は犯人探索に旅立った。旅立ったといつても、それは心構えの問題であつた。最初にしたことは家と土地の売却であつた。親から受け継いだ家と土地であつた。愛着はあつたが、断ち切つた。

都内の小さなアパートに移つた。

犯人探索に没頭できるように、贅肉を殺ぎ落としたのだつた。

それから、六カ月近い日が流れていた。

いまは、表情に苦悶が刻まれている。

警察とは綿密な連絡を取っていた。警察は警察で専従捜査員が捜査に当たっているのだつた。しかし、六カ月間の捜査で霜月は何も得られないでいた。警察を辞めたときと同じ闇が目の前に横たわっていた。何ものの影をも浮かべない、黒一色の闇であつた。

絶望感が深まっている。

五年や十年では、捜査は諦めない。その覚悟があつて、身辺から殺ぎ落とした贅肉であつた。いまも、諦めるつもりはない。冷酷無残な犯人はどこかにいるのだ。

だが、闇が深すぎてどこに潜んでいるのか見当がつかない。

どこに向かえばよいのかもわからない。

歩くべき方角を失っていた。

方角を失うと、霜月は多摩川河畔にやってきた。妻と子供の遺体のあつた場所に佇んだ。河畔に春が闌け、夏が去り、秋が去つて、冬が来た。そして、いま二度目の秋が来ようとしている。霜月は四季の多摩川を眺めてきた。季節を映す多摩川は美しかった。川が甦つて数千羽の水鳥の舞う多摩川は、季節によってするどく表情を変えた。

だが、霜月には哀しいだけの川面であつた。

霜月は水面に二人の男の貌を浮かべていた。犯行後二年たつても、目鼻のない、芝居の黒子に似た貌であつた。

貌のない二人の男が妻を犯している。

傍に、正昭が締め殺されている。

犯される妻の白い足が寒々しげに動いている。

霜月は何本目のタバコを取り出した。

——異様な男たちだ。

その思いが、つねにある。

ふつうの犯罪者ではなかった。妻と子供を家から連れ出すのは容易ではない。それを、無造作にやってのけている。ふつうの犯罪者なら、家の中で殺す。凌辱をするのに、そんなに時間がかかるわけではない。

それを、二人の男は、あえて河原に連れ出している。

霜月への恨みの他に、犯人は陰毛や頭髮などの遺留品を残すまいとして連れ出した配慮がうかがえる。

性交をすれば、現場にかならず陰毛が落ちる。頭髮も落ちる。河原なら、残らない。下半身を剥き出しておけば、寒風が運び去る。

家の中にはいっさいの痕跡を残していない。

ありふれた犯罪者ではなかった。犯罪の専門家というのも変だが、専門家ということばが執拗に浮かんでくる。たとえば、犯罪を調べる捜査員は専門家だ。それなりの知識と勘と度胸がある。その捜査員が犯罪を犯せば、このようになるのではあるまいか、との思いがある。

奇妙な思いだとは、承知していた。

焦^{あせ}りが生む幻覚なのかもしれない。

調べれば調べるほど、犯人は遠ざかってゆく。怨恨だと思つたが、その動機が割れない。妻と自分のありとあらゆる過去に手を伸ばしたが、どこにも犯人は潜んでいなかった。

怨恨でなければ物取りだが、盗まれたものはなかった。

強姦が目的なら、その場で犯す。危険を冒^{おか}して河原まで連れ出す必要はない。

結局、動機が割れない。

動機のない犯罪はないのだから、想像し得ることは、犯罪の専門家が通りがかりに、妻と子供を殺していったとしか思えなくなる。

川面をみつめる双眸^{そうぼう}に生色^{せいしよく}がなかった。

いつの間にか、周り^{まわ}りは夜の帷^{とばり}に包まれていた。

足音が近づいてきていた。長身の男が河原を歩いていく。散策のようにみえた。男が通りすぎてから腰を上げようと、霜月は思った。

男はゆっくり歩いて、傍に來た。

通り過ぎるかと思つた男は、霜月の前で足を停めた。

「火を貸してくれないか」

男は、そう、いった。

「貸さない」

無作法なもののいいかただった。霜月は腹をたてた。

「そうか……」

「失せろ」

霜月は男を見上げた。痩せぎすの男だった。暗くて貌

ははっきりとはみえなかった。

「乱暴なかただな」

男は、かすかに嗤つたようだった。

「失せろと、いつているのだ」

「失せさせてみたら、どうだ」

男は、おちついてゐた。

黙つて、霜月は立つた。男の体から殺氣じみたものがただよい出ていた。

「來い」

足場を固めた。

「おまえから、來いよ」

男は動じない。

霜月は踏み出してゐた。叩き伏せるつもりだった。出口のない捜査の闇に踏み迷つて、性格に險惡なものが出ていた。向け場のなかった憤りが、四肢にこもつていた。

踏み出して、足をとばした。憎しみのこもつた一撃だった。男の足を蹴折るつもりだった。

だが、足は宙を蹴つてゐた。

男は音もなく跳び退っている。

「それだけのことか」

男は冷たい声で、訊いた。

「……」

霜月は答えなかった。鍛えた技だった。躲されるとは思わなかった。悪寒が生じていた。相手がただ者ではないことを知った。

「火を貸せよ」

「借りてみたら、どうだ」

「そうか」